俺の世界

たまご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の世界

【Ｎコード】

Ｎ４０４４Ｏ

【作者名】

たまご

【あらすじ】

神様に神にされた男の子の話。

主人公チート設定です。

プロローグ1

俺は鉄神矢。明日から１６歳の高校生だ。
今から寝ようとしたら目の前に女の子が現れた。
「お誕生日おめでと～☆」
浮かれすぎで幻覚が見えるとは。早く寝よう。
「いや、無視しないでよ！？」
「誰だ。お前は。」
「神様ｄ「嘘つけ。」嘘じゃないよ！？」
「神なんているわけなかろう。」
「本当なんだけどなー。・・・まあ置いといて。君に誕生日プレゼントを用意しました☆
喜べ☆　君を今から神にしてあげます☆　じゃ、今から行こう☆
レッツゴー☆」
「え、あ、ちょい待ｔ」

・・・俺の意識は闇に落ちて行った。

・・・目が覚めると真っ白な空間に俺はいた。
「起きたようだね、シンヤ君☆」
「・・・夢じゃなかったか・・・」
正直夢だと思っていた。この女(かみ)が現れるまでは。
「今から君に世界を造ってそれを管理してもらいます☆　じゃあ教えるね☆　簡単簡単☆
欲しいものを想像するだけ☆」

「それだけ？」
「それだけ☆」
「ていうか自分で造って管理しろよ！！」
「君がいた世界を管理するだけで大変なの☆　じゃあ私は行くからがんばってねシンヤ君☆」
「ちょい待ちやがれ！」
「ぐえっ」
とっさに俺はあいつの服を引っ張った。
「なんでも造れるのか？」
「けほっけほっ　・・・造れるけどこの世界というか空間だけだよ☆」
「わかった。」
「じゃあ今度こそ行くから☆　最初は大地とか空とか造るといいよ☆」

・・・こうして俺の世界創造は始まった。

プロローグっぽいもの

「・・・じゃあこれの通りよろしくね」
「わかりました。」

あれから1年経ち世界はかなりできてきていた。まず、天と地を造り、海と陸を造った。そしてあらゆる植物を植えあらゆる動物を生み出した。すべての生命に魔力を与えた。そして管理をするためにこの世界の神を造った。まず、万物の管理を行う神。次に白神と黒神。白神は昼と光、黒神は夜と闇の管理。最後にこの世界の天候を管理する神だ。全部自分でできるのだが仕事はそんなにしたくない。最近は造るものが減ってきたので絶滅とかしないように気をつけるぐらいしかすることがない。そしてそれは造った神がやってくれる。
・・・・・・あれ？俺、いなくても大丈夫？なら・・・
「みんなあつまれー」
「「「「はーい。」」」」
「俺今から1万年ぐらい寝るからその間、管理とかよろしくねー。
あと、生き物を絶滅させないように。」
そういって俺は1か所に結界を張って1万年先に目覚まし時計をセットした。

～1万年後～

ジリリリリリリリリリリッッッ！！！！！！
「うわあっ！！」「きゃっ！！」
目が覚めた。ん、あれ？ジリリリなんkリリリリ違うリリリリリ声gリリリああ、もううるさい！！
ばきゅっ！と音を立てて目覚まし時計は壊れた。そうこうしていたら後ろから声がした。
「あの～・・・？」
ここは俺が結界を張っているから何も入れないはずなのだが・・・
「何者だ？」
「へ、私ですか？私はソラと言います。」
女の子がいた。見た目はかわいい。身長的に１６歳ぐらいだ。
「違う。そういうことじゃない。どうやってはいった？結界が張ってあるはずだぞ」
「私、体質的に魔法とかきかないんです。」
「は？」
「嘘じゃないですよ。だから睨まないでください。」
「・・・ファイアーボール。」
ドガンッ！！
「ケホッケホッ何するんですかぁ？いきなりぃ！！」
「まじかよ」
・・・偶然生まれた突然変異体、か。面白そうだな。
「お前」
「お前じゃありません。ソラです。」
「・・・ソラ。近くの町まで案内してくれるか？」
「・・・いいですよ」
・・・おもしろそうだとおもったがまずはこの世界はあれからどう変わったかを調べなければ。
「そういえばあなたの名前は？」
「鉄神矢（くろがねしんや）だ。この世界風だとシンヤ・クロガネだな」
「（変な名前。）・・・じゃあシンヤさん。行きましょうか。」

・・・・・・こうして創造神と少女は出会った。

山賊襲来（前書き）

今回は前より長めです。

山賊襲来

ここから一番近い街はリオザスというらしい。人口５００人ぐらいの小さな街らしい。そしてここからだと近いとはいっても徒歩で２日はかかるらしい。さらに山道で山賊達がうろうろしているらしい。

「山賊て、強いの？」

「・・・個々人だと強くないですけど、奴らは数十人で見事な連携プレーで襲いかかってくるんです。だから気をつけないといけません。」

「へぇー」

こんな感じでソラから今の世界の情報を得ていると、前方で悲鳴が聞こえた。

「きゃーーー！！」

「っ！！・・・シンヤさん、助けに行きましょう！！」

「ん？・・ああ、別にいいけど。」

「早くしてください！！」

「はいはい。」

ソラに引っ張られながら連れてかれるとその先では、武器をもった山賊が豪華そうな馬車を襲っていた。そしてドレスを着ている少女が山賊に連れ去られようとしていた。

「・・・なぁ、ソラ。あいつら俺に任せてくんない？」

「・・・え？だめですよ！一人で行くなんて危険です！わたｓ「大丈夫だから。」・・・わかりました。

ただし、死んだりしたらだめですよ！目の前で死なれると目覚めが悪いですから」
「ありがとう、ソラ。」
俺は山賊達の前に転移した。山賊は突然目の前に現れた俺に驚いている。
「っ！・・・誰だ、てめぇは！！」
「あんたらどっかにいってくんない？俺今とてもキレそうなんだけど。」
「なんでてめぇに指図されなきゃなんねんだよ！！」
そういって目の前の男達はそれぞれ持っている剣を振りおろしてきた。やれやれしょうがない。
「これより神の裁きを行う。お前たちは私を傷つけることはできない。」
俺の身体に当たった瞬間、剣が砕けた。
「お前たちの手と脚は動かない。」
男たちは崩れ落ちた。
「お前たちはロープで縛られている。――――――裁きは終了だ。」
男たちはロープで縛られた。
俺はそれを確認すると連れ去られかけた少女を起こす。
「大丈夫か？――――怪我してるな・・・治れ」
少女の怪我は治った。
「あなたいったい・・・？」
「通りすがりの人だ。じゃあな」
「え、あ、待ってください！！」
ソラの所に戻るとソラはすごい剣幕で問い詰めてきた。

「あんたいったい、何者？」
「秘密☆」
「話してください」
「秘密☆」
「話してください」
「ひみｔ「話してください」・・・ああ、もうわかった。誰にも言うなよ？」
「約束します。」
「俺は神だ」
「・・・（ププッ）」
「笑うな！！」
「だって神様って・・・ぷはははは！」
「ああもう、いうんじゃなかった。」
「・・・信じますよ。」
「え？」
「だから信じますと言ってるんです！！」
「・・・ありがとな」
「はい☆」
「ところで捕まえた山賊ってどこに引き渡せばいいの？」
「うーん。ギルドですかね。」
「ぎるどって街にある？」
「ありますよ。」
「じゃあ早くいこう。」
「はい」

ギルドにいこう

俺達は、魔物に襲われながらもリオザスにつくことができた。ソラ曰く「神様なら瞬間移動すればいいのに。」だそうだが、それでは情緒がない。旅には情緒がいるのだ。

「あ、街が見えてきましたよ。」
「ああ、もうすぐだね。」

みたところリオザスはきれいな街だ。中身がどうかはわからないけれど。
リオザスの門の前には衛士が立っている。俺達が入ろうとすると、呼び止められた。
「なんだ？その男たちは？奴隷か？この街では奴隷売買は禁止されているぞ。」
「奴隷じゃありませんよ。この山賊達が人を襲っていたので捕まえました。ギルドに引き渡すつもりです。」
「わかった。通っていいぞ。」
「ありがとうございます。」

どうやら俺たちが奴隷商人に見えたようだ。

・・・街の中はとてもきれいで、だがにぎやかだった。道にごみらしいごみは落ちていない。道の端で、色々な物を、売っている。ときどき難しそうな顔をしている人がいるが基本みんな笑顔だ。

「楽しそうな街だな。」
「いいからギルドに行きますよ。この人たち連れてたら目立って目立ってしょうがないです。」

「はいはい」

ソラに連れてかれたところは依頼所（ギルド）と大きく書かれてた。
「ここか？」
「ここです。といっても、私は来たことないんですけどね（笑）」
「なんで？」
「中入ったらわかりますよ。」

ソラの言葉がひっかかるがとりあえず扉を開けてみる。扉をあけるとその中には・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・するどい眼をした男達（もさ）がいた。
「・・・・・・バタン（扉をしめる）」
「わかったでしょう？でも今回はこいつらのせいでいかなきゃいけないんですよ？」
「・・・了解」

中に入ると男達（もさ）の眼がきつい。数多の視線の嵐から逃げるようにカウンターへ向かい、お姉さんに話しかける。

「すいません。山賊捕まえたんですけどどうすればいいですか？」
「山賊ですか？うーん、これくらい渡しますんで引き渡してください。」
お姉さんは銀貨１０枚渡してきた。
「ついでにギルドの登録したいんですけど」
「わかりました。ではこちらの紙に必要事項を書いてください。その後、魔力と属性を測りますので」
「私もお願いします。」
「ではあなたも」

・・・まさかソラも登録するとは。
俺がそう思いながら紙に書いていると、ソラがささやいてきた。
（あなた神なんでしょ。魔力測定大丈夫なの？）
（大丈夫だろ。なんとかなるさ）

紙に色々かいて受付のお姉さんに渡す。
「ではこちらの水晶に触れてください。」
「わかりました。あ、この子から先にしますんで」

ソラが水晶に触れる。すると１０３４という数字が浮かび上がってきた。
「あれ？属性がでない・・・」
「属性ってどういうことですか？」
「水晶に触れると色が変わります。それが属性です。赤なら火、水色なら水、緑なら風、茶色なら土、黒なら闇、金色だと光です。色が変わらないなんてことはないんですが・・・」
「わたし魔法を無力化するので気にしないでください。」

お姉さんは訝しげだが、誤魔化すようにソラは俺の手を掴んで水晶に押しつける。

「あ、ちょっと待て！！リミッターかけないと！！」
俺の手が水晶に触れたその瞬間、水晶は虹色に染まり砕けた。

・・・・・・シーン。
その場にいた皆が沈黙した。

「あの～登録の続きをお願いします。」
「はっはい。ではソラさんから。」
何事もなかったかのように喋っているが、その声は震えている。

「ソラさんの魔力レベルはB、属性は不明
シンヤさんの魔力レベルはXXX、属性は不明、です。」とお姉さんは一言置いて、
「あなたたち何者ですか？」と一言。
「何者と言われてもねぇ」
「俺は俺、ソラはソラだし。」
「まあ、いいです。過去にも何人かいたようですから。それではギルドについて説明します。」

お姉さんの説明によると依頼にはSSからEまでレベルがあり、それを目安にして依頼を受けるらしい。さらに自分のレベルがあがり知名度があがると指名されることもあるらしい。もちろん、最初はEランクから。

「討伐系の依頼ってなんかない？」
「Eランクですと採集系しかありませんね。」
「じゃあEランク以外で。」
「それでしたら、Sランクで火龍の討伐、Aランクでワイバーン20体討伐、Bランクでダークネスベアーの討伐、などがあります。ただ、死んだりしてもギルド側は責任をとりませんのでご了承ください。」
「んーじゃあ火龍討伐で。」
「シンヤさん、本当にそれうけるつもりですか？」
「ああ。大丈夫だって。俺がついてるんだから。これうけます。」
「やめといた方がいいですよ。」
「大丈夫ですから」

こうして初めて受けた、火龍討伐クエスト。二人は無事成功できるのか！！

ギルドにいこう（後書き）

普通の人の魔力は１０００ぐらいです。

伝説な武器できました（前書き）

まだ火龍を討伐しにはいきません。

伝説な武器できました

ギルドのお姉さんの情報によると，ここから南に3日程歩いたところにある山で，火龍が1匹暴れているらしい．火龍は文字通り火を操る龍で，火山などにいるがときおり迷子になって混乱して暴れるため、討伐されるのだそうだ。

「なあ、迷子になっただけならもとの場所に帰すんじゃ駄目なの？」

「駄目です。今暴れている火龍がいたところは他の火龍の縄張りになっているでしょうから帰してやると縄張り争いでさらに被害が広がります。」

「……わかりました。」

ソラの準備があるので出発は明日になった。

「そういえばシンジさんはどこに住むつもりですか？」

「うーん・・・宿屋？」

「それなら私がいつも泊っているところにいきませんか？知り合いの店なんでぼったくられたりしませんよ。」

「じゃそこで。案内よろしく。」

「はい。任せてください。」

「でもまずは買い出しに行くか。」

そういって市場の方へ俺たちは向かった。

「・・・シンジさん。これも買っておきましょう。保存食はあるだけあった方がいいです。」

「はいはい。」

ソラがどんどん買っていくので手の中の荷物がどんどん増え、どんどんお金が減っていく。・・・そろそろ手に持てなくなってきた

な。亜空間でも造ってしまうか。でも何もない空間から取り出すのもあやしまれるしな～・・・お、あれを使おう。
「ソラ、あのでっかいリュック買ってこい。」
「あれですか？わかりました。」
こうしてみるとソラは犬みたいだな。
「買ってきましたよ。・・・変なこと考えてませんでしたか？」
「考えてないない」

俺は亜空間を作って（サイズはでかい。街一個はいるんじゃないかな。そしてその入り口をリュックの口に設定した。そして荷物を全部突っ込む。
「そのかばんに何をしたんですか？」
「ん？ああ、亜空間を作ってその入り口をかばんの口に設定したんだよ。」
「・・・どんだけですか」

日が沈みかけている頃、俺たちは宿に向かっていた。
「宿に着きますよ」
「はーい」
ソラの友達が運営している宿はいたって普通だった。友達も普通だった。
「あらソラおかえり。隣の男だれ？いい男捕まえたじゃない。」
「そんなんじゃないってば。今日はこの人も泊るから。」
「はいはい。ゆっくり楽しんでってね」
「うるさい！！」
「私はレイナ・スチュアート。レイナって呼んでね。あなたは？」
「俺はシンヤ・クロガネだ。よろしく。」

部屋はなかなかに広かった。
「じゃあ約束の武器を造りますか」
「よろしくお願いします。」

何故俺が武器を造ることになったかというと、ソラは体質で魔法が使えないので魔物とかを倒すには武器を使うしかないのだが、店を見てみるとそんなにいいものはなかったので俺が造ってやろうということになったのだ。まあ俺が造ったら伝説級の武器になるが、いいものを持たせた方がソラにもいいだろう。
「どんな武器がいい？」
「剣がいいです。家で習ってたので。私は魔法が使えないので親が剣技を教えてくれたんです。」
「へー。じゃあ造りますか。」
すぅっと息を吸い意識を集中させる。
「はっ！！っと～」
俺の前に一振りのきれいな白銀の直剣が現れた。長さは１２０センチ程だ。
「すごい・・・」
「ソラがこの剣に名前をつけてくれ。」
「え？私がつけてもいいんですか？」
「ああ」
「ん～じゃあ、エクスカリバーにします。」
遠い昔に聞いたことがあるような・・・気のせいか
「じゃあその剣についての説明をします。その剣は持ち主、ソラの意思によって斬れるものが変わります。だから斬りたいと思えば俺以外は全部斬れる。例えば・・・」
俺は鉄の塊を取り出して剣で斬る。きれいに斬れた。
「こんな風に鉄の塊だって斬れます。次元とか魔力とかもきれるんじゃないかな。そして斬りたくないと思えばこんな風に・・・」

今度は豆腐を取り出して斬ろうとする。が、斬れない。
「斬れません。だから鎧だけ斬って人は斬らないとかもできる。」
「すごいです。そんなすごいものくれるんですか？」
「ああ、忘れてた。注意事項一つ。俺を殺すつもりでも斬ることはできないから。」
「そんなことしません！！」
「わかってるって。じゃあ明日も早いしさっさと寝るか」
「はい」

ソラは剣をもらえたのがうれしいのかはしゃぎまわっている。今度防具も造ったやるか。

・・・そうして俺の意識は夢の中へ旅立っていった。

伝説な武器できました（後書き）

次回こそ討伐にいきます。

火龍討伐

ザシュッ！！
「やっぱり魔物が多いですねっと」
ザシュッ！！ザシュッ！！ズバババババ！！
「ていうかシンヤさんも手伝ってくださいよ！」
俺達は今火龍の所へ向かっている。が、魔物が多数現れ、今も狼のような魔物の群れに襲われている。

「助けてほしい？」
「はい！！」
「わかった。魔物達よ、消えろ。」
俺達を囲んでいた魔物が嘘のように消えた。言葉にしなくても消すことはできるが気分だ。
「反則級の強さです・・・」

そろそろ火龍が見えてくるはずだが・・・もしかしてあれかな？
「なあ、ソラ。あの火の柱というか竜巻みたいなのが火龍か？」
「はい。そうです。あの火の近くに行くだけでも身体が焼けてしまうとか。」
「じゃあ作戦を発表する！！まず、ソラ！！」
「はい！！」
「俺が火を消すからその間に火龍の頭をかち割れ！！」
「はい！！」
「以上を以て作戦会議を終了する！！」
・・・そんなこんなで火龍のもとへ

・・・・・・２０メートルはあろうかというような巨大なドラゴ

ンがいた。それなりに高い知性を持っていそうだ。とりあえず、話しかけてみる。
「お前神様を信じるか？」、と。
「いるわけねぇだろう！！いたとしたら俺がぶっ殺してやろう！！」
ちっ
「わかった。・・・これより神の裁きを行う。炎よ、消えろ」
・・・ドラゴンの周りの炎が全て消えた。
「てめぇ！何をｓ「しゃべるな」・・・・・・。」
・・・ドラゴンの声が消えた。
「ひれ伏せ」
・・・ドラゴンがひれ伏した。
「やあああっっっ！！！」
ソラが斬りかかり、火龍（ドラゴン）の首は落ちた。

「よし帰るぞ、ソラ」
「はーい」
火龍を倒した証明になる部位を亜空間にしまうとソラに声をかけた。帰りはめんどくさいので転位で戻ることにした。
「それにしてもこの剣すごいですね。ドラゴンなんて剣で傷をつけれるようなものじゃないのに。」
「だって造ったの俺（かみさま）だもん。」
「はい☆」

・・・ギルドに戻り火龍の部位を渡すとお姉さんはやっぱり驚いていた。
「あなたたち何者ですか？」
「秘密☆」
「・・・。・・・ＳランクのクエストをクリアできましたのであなたたちのランクもＳになります。」

「よっしゃ！」

王都へ行こう

火龍を倒した俺達は街で一躍有名になった。しかし、人の噂もなんちゃらかんちゃら。その後、適当に依頼を受けて（といってもほとんどAかBランク）宿に帰るということをしていたら、噂もなくなってきた。そんなある日森でレッサードラゴン（Aランク）の討伐を終えた帰り道、ソラがある提案をしてきた。

「シンヤさん。王都に行ってみませんか？」

「王都？」

「はい。この街からシンヤさんが眠っていた森を通って7日ほど歩いたところにあります。」

「・・・・・・そこって神殿ある？」

「ありますよ。光の神ヴァイスと闇の神ノワールの神殿です。」

「（・・・あいつらなら大丈夫かな）・・・いいよ。行こうか。」

「じゃあ私、王都まで護衛の依頼がないか探してきますね。」

「頼んだ。先に宿で待ってるから。」

「はい！！」

元気良く返事をすると駆け出して行った。・・・子犬みたいだな。

俺が宿のベッドで寝っ転がっているとソラが帰ってきた。

「おかえり。どうだった？」

「ただいまです。ありましたよ。」

「いつ出発―？」

「――――明日です。」

「はやっ！！」

「王都までいってくれる護衛役が2人しか集まらなくて、明日にはここを出発しなきゃいけないどうしよう、と悩んでたところに私が

来たので是非とお願いされて、断れませんでした。」
ソラはお人よしだからなあ。
「明日出発なら今日は早く寝るか。」
「はい。・・・ひとつ質問よろしいですか？」
「なんだ？」
「なんで王都の話をしたとき、神殿のことなんか聞いたんですか？」
「うーん。今は話せないかな。王都に着いたら教えてあげよう。」
「わかりました。」
「じゃ、今度こそ。おやすみ。」
「おやすみ～」

集合時間は朝8時だった。待ち合わせの場所に行くとすでにほかの護衛役2人と、護衛対象が来ていた。
「遅れてすまない。俺はシンヤ・クロガネ。あいつはソラ。よろしく。」
「いえいえ気にしないでください。僕はカイン・ミズキリです。」
「俺はタロス・ミノだ。よろしく。」

「・・・ソラ。」
「はい？」
「この依頼受けてよかったな。皆いい人っぽい。」
「そうですね。「おーい。早くしないと置いてくぞ！！」・・・呼んでますよ。」
「行こうか。」
「はい。」

神（が造った）槍ゲイボルグ

初めの2日は何事もなかった。そして今、3日目。俺らは魔物の群れ（１００ぐらい）に囲まれていた。
「シンヤー！！手伝えー！！」
「シンヤさん！！殲滅してください！！」
・・・まったく。自分でやれっての。

「カイン、お前は行かないのか？」
「はい、僕は回復専門なんで。」
「そうか。」

「タロス！！ソラ！！・・・くたくたか？」

「「くたくた！！」」

「じゃあ後ろに下がってろ。」
「お前ひとりｚ「大丈夫ですよ。」あいつそんなに強いのか？」
「はい。」

２人とも下がったのをみて、俺は言葉を発する。
「神の命令を下す・・・魔物たちよ、トマレ」
魔物達がトマッタ。
「そしてキエロ」
魔物たちが跡形もなくキエタ。

振り返るとタロスとカインは驚愕に満ちた顔でいた。
「シンヤ・・・お前、いったい・・・？」
「神様だ。」

「・・・教えてくれはしないか。まあいいや。今度から戦闘よろしく。」
「（本当なんだがな）いやだよ。めんどくさい。」
「あれだけの力を持ってんなら頼むって。」
「やだ。」
「お前も護衛だろ！？」
「・・・やばくなったら助けてやるから。」
「・・・ちっ。」

タロスは舌打ちするとまた見張りに戻った。しょうがないだろ・・・神として世界に干渉したらつまらないし。

その後もとくに魔物の大群に襲われるなどということもなく、平和に王都へと向かっていた。そして、明日は王都に着くという日の夜。俺達は何事もなく王都に着きそうなので浮かれていた。
「明日はもう王都だな。」
「ああ、お前といっしょで楽しく過ごせたよ。」
「お別れに何か武器を造ってやろうか？」
「どうやって？」
「秘密。で、どんなのがいい？」
「ん～～じゃあ槍で。」
「よし、わかった。」

俺はソラのエクスカリバーを造ったときと同じように意識を集中させる。なにか能力もつけよう。う～ん、あ、あれにしよう。
「よし、出来たぞ」
「わお！！・・・ていうかどうやって造ったんだ、本当に。」
「いったろ、俺は神様だって。まあ、それは置いといて。その槍に

名前を付けて。」
「わかった。・・・ゲイボルグにしよう。」
「じゃあその槍の能力を説明するぞ～。槍に魔力を通すとその魔力の属性と同じ現象が槍に起きる。例えば、炎の魔力を通せば槍が燃える、みたいな?あと槍に魔力量の設定をして、その設定した魔力量を超える魔力を通すと、相手の急所を自動的に狙うようになるから。」
「なんかすごいな・・・。ありがとな・・・。」
「いやいや、こちらこそ。この依頼受けてよかったよ。」
「そういってもらえるとうれしいな。」

朝には王都に着き、無事護衛のクエストは完了した。

幕間

その少女は探していた。雨の日も。雪の日も。ただひたすらに探していた。

その少女は探していた。雨の日も。雪の日も。ただひたすらに探していた。

その男性は働いていた。雨の日も。雪の日も。ただひたすらに働いていた。

その女性は働いていた。雨の日も。雪の日も。ただひたすらに働いていた。

４人とも形は違えど、１人の男を待っていた。

１万年間待っていた。１人の男を待っていた。

その少女にとって男は父であり、兄であった。

その少女にとって男は父であり、兄であった。

その男性にとって男は父であり、兄であった。

その女性にとって男は父であり、兄であった。

４人とも男を愛していた。

その少女は妹として。

その少女は妹として。

その男性は弟として。

その女性は妹、そして女として。

皆、何よりも男を愛していた。

その男は・・・シンヤ・クロガネという。

幕間（後書き）

さあ４人は誰でしょう。

ソラのオウチ（前書き）

今回はかなり短いです。

ソラのオウチ

王都はリオザスよりもにぎわっていた。見渡す限り人、人、人。さすが王都。

「人がたくさんいるな。」

「はい。なんていったって王都ですから。王様の御膝元ですよ。」

「そういえば、どうして王都に来たかったんだ？」

「それはですね・・・久しぶりに両親に顔を見せようと思いまして。」

「どれくらいあってないんだ？」

「2か月くらいですかね。そんなに離れる予定はなかったのですが・・・誰かさんの面倒見てたら、帰れなくなってしまいました。」

「（俺のせい・・・？）・・・じゃあご両親に会いに行くか？」

「はい！！」

ソラの家がどこにあるかは知らないので、さくさく進んでゆく。・・・気のせいかもしれないが、なんか周りの家々が大きく、そして豪華になってゆく。

「ソラの家って金持ち？」

「ええまあ。あ、家に着きます。」

「おおぉ・・・すげぇ。」

・・・でかかった。庭だけで周りの家の3倍ぐらいはある。門から屋敷が小さく見える。

「ようこそ、シンヤ・クロガネ様。改めまして自己紹介を。ソランザム・デイル・ディ・カルペールと申します。どうぞよろしくお願いします。」

手を差し出すソラ。

「こちらこそ、よろしく。」

その手を握り返す。
「じゃあ案内しますね。」
屋敷までの道には様々な草花が咲いている。隅々まで手入れが行き届いているようだ。

ソラのオウチ（後書き）

次回。ソラのお父さんとお母さんの登場です。

ソラのお父さん

「ソラをこれからもよろしく頼むよ、シンヤ君」
「はい。責任を持ってお嬢さんをお預かりします、ルドルフさん。」
「ところで私と戦ってくれるかね？私より強くないと安心できないのでね。」
・・・何故、こんなことになっているのだろう。

～回想開始～

大きな池の中に屋敷が立っている。
「あそこに私の母と父がいます。兄は・・・わかりません。」
そう言いながら、ソラは池の前に行きつながれているボートに乗る。
「え？橋があるのに渡らないのか？」
横の方にはちゃんと大きな橋がある。
「あの橋はカルペール家の客のための橋なんです。シンヤさんは私のお客さんですから、通れません。」
「へー」
「はい。がんばってください。」
「へ？」
ソラが頑張ってくださいと言いながら渡してきたのは1本の、1本の長いオールだった。
「・・・俺にこのボートを漕げ、と？」
「はい☆」
「ソラの、客なのに？」
「いいから漕いでください。」
「へいへい。」
俺とソラを乗せたボートはゆっくりと進みだした。

「疲れた・・・。」
屋敷までは短い距離に見えたのだが水（だと思いたい）の抵抗がかなりあって中々進まず、時間と精神を浪費した。
「何か冷たいもの出しますね、と言いたいところですが、まず先に両親に会っていただけますか？」
「わかった。」
まあ、しばらくこの屋敷でお世話になるのだから挨拶するのは当然だろう。そう思い、腰を上げる。
「顔見せるだけでいいですから。だいたいの事は手紙で伝えてあるので。後、神のことは言わないでくださいね。」
「何故？」
「私も父のことは信じていますが、一応伯爵なのであなたを祭り上げて権力を握ろうとするかもしれません。ですから・・・「わかった。言わない。」・・・ありがとうございます。では、行きましょう。」

ソラについてゆくとある豪華な部屋の前で止まった。ソラがノックをする。
「失礼します。」
「おお！！ソラか。お帰りなさい。心配したぞ。」
「お帰りなさい、ソラ」
部屋の中には、ダンディーな男性とグラマーな女性がいた。
「おや？君がシンヤ君かね？はじめまして。ルドルフ・デイル・ディ・カルペールだ。君の事はソラからの手紙で話は聞いているよ。」
「はじめまして、ルドルフさん。シンヤ・クロガネです。」
ルドルフさんは温厚で優しい人だと話しててわかった。そのままルドルフさんと話していると、ソラが割り込んできた。

「お父様、よろしいでしょうか。」
「何だい？ソラ。」
「シンヤさんといっしょに旅をしたいのですがいいですか？」
「「はい？」」
「だから「いいよ。」・・・本当ですか？お父様！！ありがとうございます！！なら早速準b「まあ待てソラ。まずはシンヤ君に聞きなさい。話はそれからだ。」
ソラがぎゅるりとこちらを振り返る。
「いいですよねシンヤさん？」
「あ、ああ。うんいいよ。」
～回想終了～
・・・ソラが原因か。後でお・は・な・しするか。そう決意してソラを見るとおびえていた。
「で、どうなのかね、シンヤ君？」
「あ、はい。受けます。」
すると、ソラが俺だけに聞こえるように話しかけてきた。
『私の父を殺さないでくださいよ？』
『わかってるって。リミッター掛けるから。』
『低く設定したら、父は強いので倒されますよ。』
『わかった。』
「庭でやろう、シンヤ君。早くしてくれ。」
「わかりました。今行きます。」

ルドルフさんの武器はでかい剣だ。後、背中に背負っているロングソードだ。・・・ロングソードはまだいい。しかし、あのでかすぎる剣は何だ？・・・皆さんは斬馬刀というものをご存じだろうか。文字通り馬ごと敵をきるようなでかい剣だ。ルドルフさんの持っている剣はまさしくそれだ。普通にルドルフさんの2倍の長さはある。
「さあ、死ぬ覚悟はあるか？少年。」

ソラのお父さん（後書き）

次回・ルドルフさんＶＳシンヤ、をお送りいたします

少年（かみ）と父親（ひと）

「娘を死んでも守るという覚悟がないやつに娘はやれん」
親バカ、だな。だが、ルドルさんは真剣だ。ならこちらもそれに応えるべきだ。そう思い、俺は亜空間から1本の剣、いや刀を取り出す。その刀はシンヤが1万4年前、つまりこの世界を造ったばかりの頃に作ったものだ。次元だろうが何だろうが斬れる。そのあらゆるものを斬り裂く漆黒の刀の名はワールド・ブレイカーという。
「その剣は？」
「おれが現在持っている最強の武器ではないかと」
「まあいい。いくぞ！！」
ルドルフさんが斬馬刀を振り下ろす。それを俺は・・・斬る！！
「鉄流派奥義・居合切り！」
俺の神速の居合切りで斬馬刀が斬れる。ルドルフさんは一瞬驚いたが、すぐに背中のロングソードを抜いて構える。さすがだ。
「カルサラ王国一の剣豪と呼ばれる俺にこんな短時間で剣を抜かせるとはな。」
「（そんなにすごいのかよ、この人。）・・・魔法使ってもいいか？」
「いいぜ。来てみろよ。」
ルドルフさんがニヤッとしたのが気になるが、とりあえずファイアーボールを10発撃つ。
「甘いな。」ザンザンシュッシュッザン
「・・・はっ？」
ファイアーボールが全てあの剣に触れた途端に消えた。・・・あの剣は俺にはやばいかも。すぐに決着をつけなければ。俺はリミッターを解除、神格を解放する。
「っ！？」
ルドルフさんの顔が一瞬で恐怖に変わった。

「俺にとってその剣は危険だからな。決着をつける。動くな。」
「身体が・・動か・・・ない・・。」
「汝が持つ剣は消滅する。」
ルドルフさんが持つ剣が消えた。そして俺はのどにワールド・ブレイカーを突き付ける。
「降参だ。きみにならソラを任せられそうだ。」
「ありがとうございます。」

「旅に出るのを3年ほど待ってみないか？」
夕食の時にルドルフさんが言った。
「何故ですか？お父様？」
「実はな、シンヤ君も１６歳だということで、学園に通わせれるのでは？と考えたのだ。」
「あの・・・学園てなんですか？」
「ああ、知らないのかい？学園というのはね、このカルサラ王国と隣国のロン・レイル帝国が合同でやってる学校だ。正式名称は２つの国の名前をとって作ったロンサラ学園。来るものは拒まずの学校だ。」
「どうしてそこに通わせたいのですか？」
「２人旅はさびしいだろうからそこで仲間でもみつけなさい、ということだ。どうかね？」
「うーん。ソラ、行ってみないか？」
「シンヤさんが行くとこにはどこへだってついていきますよ。」
「じゃあ、決定だ。しっかり勉強して友人を作ってきたまえ。孫ができるかも知れんがな」
「「っ！？」」
「冗談だ。じゃあ手配するから、明日には出発したまえ。」

「「はやっ！！」」

こうして2人はロンサラ学園に行くことになった。

少年（かみ）と父親（ひと）（後書き）

シンヤが神格を解放したときにルドルフさんがおびえた理由。ソラは魔力を無効化するのでわかりませんが、ルドルフさんは一般人なので無意識に神格を感じ取ったということです。

転入だ、試験だ、親子の出会いだ！！

学園へはとくに何事もなくつくことができた。もちろん、転位は使ってない。今、俺は自分にリミッターをかけているので神としての力は使えない。まあそれでも誰にも負けないだろうが。

学園に着いたはいいがどこに行けばいいのかわからない。そう悩んでいたら、それなりに年をとった、おじいさんがやってきた。
「シンヤさんとソラ様ですね？」
「「はい。」」
「案内しますのでついて来てください。」
「わかりました。」

案内のおじいさんについて行くと面談室のような部屋に着いた。
「では学長が来るまでここで待っていてください。」
「はい。」
しばらくすると服を着替えたさっきのおじいさんが部屋に入ってきた。
「あの・・・学長は・・・？」
「ああ、私です。」
「学長がわざわざ案内してくれたなんて、ありがとうございます。」
「今先生がたは授業をしているので私がするしかないんです。」
と、おじいさん改め学長は一息ついて話しだす。
「ルドルフさんから紹介を受けました。２人を転入させてやってくれと。ということで試験を行います。
試験は簡単。あの水晶に触れるだけです。」
・・・なんかデジャビュー。あ、でもリミッターかけてるから大丈夫かな。

「水晶は本来の力を測るのでリミッターを掛けていても無駄です。では触れてください。まずソラさんから。」
ソラが水晶に触れる。すると水晶にBと文字が浮かびあがる。
「ソラさん、合格です。あなたはBクラスで受けてください。では、次。」
続いて俺も水晶に触れる。するとXという文字が浮かび上がった。
「・・・X？」
「XはSSの上のランクです。さすがルドルフさんを倒した人だ・・・。とにかく、あなたも合格です。
あなたは・・・そうですね、Sクラスで受けてください。」
「わかりました。」
「じゃあ、この学園での生活について話します。まず寮に入ってもらいます。ご飯は自分でお金を払ってください。」
「学長。ソラといっしょの部屋にしてくださいませんか？」
「何故ですか？」
「俺には秘密があってソラは知っていますが、あまり他人には言わない方がいいので。」
「どんな秘密かは聞きませんが・・・わかりました。そのようにします。では、次。授業についてですが
1週間のうち、5日が授業で2日が休みです。いいですか？」
「はい、」
「では、次・・・」
こんな感じで学園についての説明を受けた。
「・・・以上で説明は終わりです。ではこれからあなたたちの担任を紹介します。まずSクラス担当のノワール先生です。先生、入ってきてください。」
学長に呼ばれて入ってきたのは・・・闇神ノワールだった。

娘そのいち！

ノワールはこちらを見るなり俺が反応するより早く体当たり・・・もとい抱きついてきた。
「お父さん！！」
「「お父さん！？」」
「離れろ、ノワール。」
俺はノワールを引き剥がすと、固まっている2人（ソラ&ガクチョー）を揺らす。動かない・・・。
まあいいか。そう思い、ノワールに向き直って・・・再び抱きつかれた。
「離れろ、ノワール。」
「いやだよ～☆だって一万年ぶりなんだから。少しぐらいいいじゃん。」
「はぁ・・・」
そういえば昔からよく抱きついていたなぁ。
「皆心配してたよ。ずっと起きないんじゃないかって。」
「あ～・・・。心配させてごめんな。」
「本当に心配したんだからね。」
「そういえばどうしてここにいるんだ？」
「それはね、学園に教師としていれば生徒を育てるでしょ？それで生徒達に御父さんの特徴を教えて、見つけてもらうつもりでここにいたんだけど、もう意味ないね。」
「そんなことないぞ。なぜなら俺はここに転入するからな。」
「そ、それ本当なの？」
「ああ。」
「ヤッター！！」
「そんなに大騒ぎすることか？」
「うん！・・・そういえば一緒にいる女の人誰？まさか彼女？」

「へ？わ、私が彼女、ですか？」
いつのまにか復活したソラが反応する。
「そう。でも御父さんが好きなら別にいいけど。」
「シンヤさんは私を好きなのでしょうか。」
「少なくとも御父さんは好きじゃない相手と旅をしたりしないよ。」
・・・気のせいだろうか？だんだん話しが変わってきている気がする。
「あの～いいですか。」
固まっていた学長も復活。
「ノワール先生とシンヤさんは親子なんですか？」
いっていいのだろうか。そう思いノワールに聞く。
『この人って信用できる？』
『できるよ。悪い人じゃないよ。』
・・・ならいいかな。
「学長。これから話すことを漏らさないでくださいね。」
「わかりました。」
「では。確かにノワールと俺は親子です。ノワールとその兄妹は１万年ほど前に造りました。」
「い、いちまんねん！？それは神々の時代じゃあ・・・。あ、ノワール？闇の神と同じ・・・。もしかしてあなたは・・・！？」
「たぶん正解です。俺はこの世界の最高位の神、というか管理者かな。」
「あ～。ルドルフさんが勝てないわけですね。」
「このことを知っているのはソラとノワールと兄弟たちぐらいですかね。だから秘密にしといてください。そういうことで、もう寮に行っていいですか？」
「はい。・・・４人部屋が空いているのでそこに入ってください。」
「わかりました。ソラ、行くぞ。」
そういって、ノワールと談笑していたソラを連れていく。
「あ、引っ張らないで～。」

「御父さん、私もいｋ「駄目だ。」ちぇっ」
ノワールを退けると学長に挨拶。
「それでは先生方。さようなら。」

寮は快適だった。というか、快適にした。まずエアコン。照明は十段階調節。この世界は魔法で調節するので部屋の中にいるときは常に魔力を消費して温度・湿度を調節する。しかしそれには火・水・風の属性を必要とする。俺はできるが、ソラは魔法を使えないのでエアコンを造った。照明も同様。電気は電池式で、電池の時をとめているので中の電気を消費しても元に戻るという仕組みだ。これを披露したとき、ソラは驚いていたが、すぐに納得した。
「まあシンヤさんですし。」
「なんだそれは（笑）。・・・寝るから光を消すぞ？」
「はい。おやすみなさいシンヤさん。」
「おやすみ、ソラ」

こうして今日も一日過ぎて行った。

自己紹介とか模擬戦とか（前書き）

ちょっと間があきました。ごめんなさい。m（＿＿）m

自己紹介とか模擬戦とか

朝起きるとソラが俺の腰に抱きついていた。・・・俺は抱き枕ではないのだが。それもこれもあの学長がベッドを2つ用意しないからだ。『てっきり2人が恋人どうしかと・・・・。』・・・あいつの声が思い出される。しかし、そろそろ支度をしなければならんな。転入初日から遅刻するわけにはいくまい。ということで俺はソラを起こす。

「ソラ、起きろ。朝だぞ。」

「ふにゃーー。あとごふん・・・・。」

いい度胸だソラ。俺は指パッチンをし・・・ようとしたが失敗した。まっ、できなくてもいいのだが、少し悲しい。その分ソラにやつあたりだ。俺の右手の周りを0度まで下げる。そして右手を・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・寝間着の中（もちろん背中）に一気に突っ込んだ。

「ひやぁぁぁぁーーーーーーーー！！！！！」

「起きろ。ソラ。」

「わかりました！！わかりましたからその手を抜いてください、お願いします！！」

「はいはい」

ソラが覚醒したようなので手を引き抜く。そして、元に戻す。

「ソラ、早くこの手を離して準備しろ。転入初日から遅刻するつもりか。」

「あ、ごめんなさい。」

ソラはあわてて手を離して着替え始めた。ふと、何かに気がつくとシャワールームに駆け込んで行った。・・・・・・ちなみに学園の始業時間は8時40分。HRは8時半から。それまでに行かなければならないのだが、今の時刻は8時20分。寮から教室まで5分

（走って）。やばいぞ。俺のことは隠しておきたいから、転移は使いたくないしな。
「ソラ、後5分だぞ！」
「後ちょっとで・・・できました。」
「よし、走るぞ！！」
「あ、待ってください～。」

まさか転入初日に走ることになるとは。ともかく職員室につくとソラと別れ俺はノワールの所に行った。
「・・・そういえばSクラスって何人ぐらいいるんだ？」
「4人だよ。おと・・・シンヤくんが入るから5人。」
ノワールには昨日、学園では御父さんと呼ばないように言っておいた。
「その4人って強いのか？」
「一般人レベルでいえば強いよ。・・・あ、教室につくよ。」
教室に入ると、3人の女子に1人の男子がいた。横1列に座っている。1番右が男子だ。
「皆さん、今日からこのSクラスに転入生が入ります。自己紹介して。」
「シンヤ・クロガネだ。よろしく。」
すると左端から名乗り始めた。
「フィオナ・クーリ。得意なのは水と風です。よろしく☆」
「キルラ・リウだ。得意なのは火だ。よろしく。」
「エレナ・ハニルバ。土が得意。・・・よろしく。」
「カイト・ゲルニカだ。魔法は得意じゃないが、武器の取り扱いと体術は得意だぜ。」
皆名乗り終えると、ノワールが口を開いた。
「じゃあ今日は模擬戦しようか。シンヤ君の実力を確かめてみなさ

い。」
・・・えー。ダル。
皆について行くと広い競技場のようなところに着いた。
「じゃあ誰から行く？」
「俺が行くぜ。さあシンヤ、全力でかかってこい。受け止めてやるから。」
カイトが名乗りをあげた。
「ちなみに先生より強いからね、シンヤくんは。」
「「「「まじかよ・・・」」」」
「訂正。全力でかからせていただきます。」
「じゃあ受けて立とう。・・・こういえばいいのかな」
「では。ヤアアアアアアアアアアアア！！」
カイトが剣を振りながらかかってきた。すぐさま、俺もワールドブレイカーで応戦、そして剣を切断。
するとカイトは槍をもっていた。
「っ！！いつのまに！！」
その槍も切断。カイトは後方へ下がった。今度は弓を持っていた。
「俺は土魔法で武器を造りだす。土と魔力がある限り、俺の武器はなくならない！！」
「やっかいな・・・。」
数多の矢が飛んでくる。さっさと決着をつけるか。そういうことでカイトの目の前に一瞬で移動＆ワールドブレイカーをのどに突き付ける。
「降参だ・・・。」
「勝者シンヤ・クロガネ！！」
ノワールが判定を下す。
「まあ、神より強い奴に勝てるわけねえわな。」
カイトはそういって笑う。・・・今こいつなんていった？神より強い奴？もしかして・・・

「ノワール。お前正体ばらしてんのか？」
「え、ばらしてるというか、ばれちゃった。」
「じゃあ隠す必要ないじゃん・・・」
４人を見ると何やら話しあっている。お、話が終わったようだ。
４人はこちらに来ると、
「シンヤに全員でかかってもいい？」
「いいですよ。」
といった。・・・ノワール何勝手に応えている。

「それでは・・・はじめ！！」
カイトが突撃してくる。その後ろから女性軍団の魔法が襲ってくる。もうばれてんならつかってもいいか。
「カイト。トマレ。」
カイトが動かなくなる。
「オチロ。」
飛んできた火や水の玉が堕ちる
「キエロ」
風の刃が堕ちる。
「シャベルナ。」
女性陣の詠唱が止まる。
「ノワール、俺の勝ちだな？」
「はい。勝者シンヤ・クロガネ」
「モトニモドレ。ノワールハオシオキ」
皆が元に戻る。ノワールにはしばらく悪夢を見せることにした。
「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい・・・
」

ソラは皆の人気者（前書き）

短いです。

ソラは皆の人気者

どうやらソラがそばにいると俺はとっつきやすいらしい。おそらくソラの魔法無効化能力で、無意識に皆が感じている神格が薄らぐからだろう。ソラが傍にいるかいないかで周りの態度が違う。Ｓクラスの奴らは大丈夫そうだが。放課後、そんなことを考えているとカイトが話しかけてきた。

「そういえばなんでシンヤはここに転入したんだ？お前が学ぶことなんてないだろう。」

「ん？ああ、ソラといっしょに旅をするつもりだったんだが、ソラの父親にここで信頼できる仲間をつくっていけと言われたんだ。」

「ソラってＢクラスのソラちゃんか？かわいいよなあ・・・。」

どうやらソラは人気者らしい。

「ソラちゃんのファンクラブもあるらしいぜ。ちなみに俺は会員番号００００１だ。」

創始者はおまえか。

「ソラにいらんちょっかいかけたら殺すぞ。」

「かけないよ。そもそも最高神の加護がかかってるソラちゃんを殺すなんてできないだろ。」

「いや加護はかかってないよ。正確には掛けられない、だけど。」

「何！？ていうか掛けられないってどういうことだよ！？美少女は護られるべきだ！！世界の宝なんだよおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！」

「オチツケ。」

「っ！！・・・はあ。ありがと、シンヤ。」

「じゃあ俺はソラといっしょに買えるから。じゃあな。まあ寮だから近くだけど」

「おう。じゃあな。」

ソラを迎えに行くとBクラスには人だかりができていた。
「ソラ～。帰ろうぜ～。」
「は～い。」
するとソラが人垣の間から出てきた。皆がこちらをみている。1人が質問してきた。
「2人はどんな関係なんですか？」
「・・・友人というか、ルームメイト？」
女子生徒が色めき立つ。逆に男子生徒は睨みつけてくる。
「俺たちのソラちゃんをとるんじゃねぇよ！！」
うおう。びっくり。嫉妬かよ。
「まずは俺達を倒してからにしろ！！」
しかも俺に倒せると思ってる。ちょっとやってみるか。
「ソラ離れてみろ。」
「へ、あ、はい。」
俺の神格をすべて解放する。空気がビリビリと震えだす。ソラ以外は青ざめる。
「さあ、誰からだ？かかってこい。」
「・・・・・・。」
「かかってこないのか？なら帰るからな。」
皆、一斉に首を縦に振る。
「ソラ、帰ろう？」
「はい。でも皆どうしちゃったんでしょう―？」
もとに戻してから、笑いながら皆に聞く。
「なんでもないよな？」
「何でもないです！！」

次の日に学園に来ると次々と襲撃（主に男子生徒）された。なに

やら俺を倒すとソラと付き合えるとか。大方俺を疲弊させて一気に襲撃すれば勝てるとでも思ったのだろう。まあ全て撃退したが。そのせいで学長に呼び出しをくらった。

「なんとかしてください。出席者が半分も減るなんて・・・。」

「あ～じゃあ決闘大会でも開いて俺に勝てる奴はいないことをみせつけたらどうですか？」

「それはいい！！じゃあ今日の午後にでも。」

「わかりました。」

ソラは皆の人気者（後書き）

つぎは外伝です。１万年後のお話。シンヤの世界に勇者として召喚された少女：神谷伊予。伊予は神と会い、どう変わってゆくのか。

姫さんの策略（前書き）

次回予告とは違う形になりました。

姫さんの策略

決闘大会ははっきし言ってつまらなかった。当然と言えば当然だが。問題はその試合を見ていた人がいたことだ。その名はエウレリア・ライ・スベンイ・・・・（長い名前）・・・カルサラ。名前通りカルサラ王国の姫さんだ。そして姫さんは俺が助けた少女でした☆当然、試合終了後連行された。お礼がしたいなら、強面の騎士さん達で囲む必要はないと思う・・・。

「だってそうしないと逃げられますから。」

「別にどれだけいようと逃げれるけどね、ホラ」

俺は周りの騎士さん達を縄で縛った。

「また、そんなことを（笑）・・・ってえええ！！精鋭を選んだのに」

「姫様、こいつは危険です！！逃げてください！！」

「こら！！この方は命の恩人ですよ。それに依頼をお願いするのだから私が話すべきでしょう。」

「・・・依頼って何のことだ？」

てっきりお礼をしたいとかそういうことかと思ったのだが。

「それもありますが、・・・王国の騎士になってほしいのです。」

「お断りする。」

「何故です？」

「俺は学生だ。だk「それは問題ない。」・・・どういうことだ？」

「実は国王から圧力をかけられて・・・すみませんね。」

「ちっ！！でもお断りします。俺はソラだけを守るつもりなので。ルドルフさんにも約束しましたし。」

「じゃああなたの神殿をつくってさしあげます。お断りするなら・・・ノワールさんをソラさんを殺しましょうかね。」

どこまでなめてんだこいつは。

「調子に乗るなよ小娘。」

俺の怒気で空気が震える。皆の顔がこわばる。
「神殿なんて俺の存在を知らしめればすぐにどこにだってできるだろう。ソラが死んだって生き返らせれる。そんなものに興味はない。いいか？おれはそんなクソったれなもんになるつもりはねぇ。もっとほかの人材をさがせ。自分たちのことは神に頼らず自分で何とかしろ。わかったか？」
皆うなずく。最近同じことばかりやってるような・・・。
「ああ、それと今後俺とソラにちょっかい出したらこの世界を初期化・・・つまり滅ぼすから」
そう捨て台詞を残しソラの所にいく。

ｓｉｄｅエウレリア
怖かった。死ぬかとおもった。
「舐めすぎてたかもしれませんね。」
はい、と騎士Ａ。
「どうしましょうか、エウレリアさま。」
「そうですね。シンヤ神にばれないように接触した人々に会いましょう。」
「はい。」

ソラを発見すると単刀直入に言う。
「この学園を出るぞ。」
「え？それってどういう・・・」
ソラに今あったことを言う。
「というわけで学園を出るぞ。」
「せっかく友達もできたのに・・・」
「すまんな、ソラ。あのクソ王女が・・・」

「というわけで学園をやめるから。」
「え、ちょっと待ってくださいよ」
俺とソラは学長のところにいた。
「退学扱いでいいから。」
「そういうわけにはいけません。・・・じゃあ卒業扱いにします。」
「ありがとな。学長。ついでにノワールも連れてくから。」
「え、ちょ、まっ！！」
無視無視～♪

「ノワールはいるかー！！」
「はい、ここにいます！！」
突然の大きな声にびっくりするノワール。
「この学園を出るぞ。じゃあ出発進行～」
「私には仕事がああああぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～」

こうして仲間をふやして冒険（？）することになった。ノワールは最初は渋っていたが説明すると、納得してくれた。

姫さんの策略（後書き）

ちなみに次回予告でお知らせした。勇者のお話ですが、俺の世界：さらに1万年後という題名でやってます。リンクをさがしてください。

ソラ、魔法が使えるようになるのこと

学園を出た後、とりあえずルドルフさんの所へいった。最初は怒っていたが俺達（というより俺）の話を聞いているうちに落ち着いてきた。

「あの姫様は強欲だからな（笑）ほしいものの為ならなんだってやる。それがあの姫様だ。旅にでても気をつけなさい。」

「はい。わかりました。」

「とりあえずこれだけ持って行きなさい。」

そういってルドルフさんが渡してきたのは金貨がたくさん入った袋だった。

「いいんですか？こんなにもらっちゃって」

「ソラを一生面倒見てくれる報酬だ。これからよろしく頼むよ。」

「わかりました。」

・・・あれいつの間にか旅の間、から一生になってない？まあいいか。

「最初はそうだな。カルサラ王国の同盟国のストランバイア共和国なんてどうかな。食べ物がうまいらしい。平和だし。」

「じゃあそこにします。今までお世話になりました。」

「さようなら。」

ストランバイアに向かう途中にソラに思いついたことを聞いてみる。

「魔法を使ってみたいか？」

ソラが魔法を使えるようになれば、ソラの戦闘の幅はかなり広がる。エクスカリバーに魔法効果を付与すれば物理的攻撃が効かない

敵も魔法的なダメージを与えられる。スライムとか。でも俺の当初の目的って突然変異体のソラを観察することだったような・・・。ま、いっか。

「使えるようになればどれだけうれしいことか！！でも私には無理ですよね」

「いや、できるように今からする。」

「え？それってどういう・・・」

とりあえず指パッチン。ソラの身体が光りだす。

「わわわっ！！これ何なんですか～」

光がおさまった。

「これで魔法が使えるようになるはずだ。今、適性を見てやるからおとなしくしてろ。・・・光か。魔力は・・・５０００！？増えてるな。俺といっしょにいたせいか。」

「５０００！？・・・すごい。」

「ソラ、ライトって唱えてみろ。」

「はい・・・。」

小さく、しかしはっきりとした声でライト、と発する。その瞬間ソラの身体の中を魔力が流れ、ソラがかざした手にまぶしく光る球体が現れる。

「魔法が使えるようになるなんて・・・。本当にありがとうございます！！」

「光の適性があるってことは火と風も使えるな・・・。旅の途中で練習するか。」

「はい。・・・ところで闇の適性がある人は闇以外にもつかえるんですか？」

「ああ。ノワールは純粋な闇の化身だから使えないけど。まず、属性にも光側と闇側があるんだ。というか、俺がそういう風に設定した。で、火と風は光、水と土は闇よりだ。基本的に光の属性を持つ者は闇の魔法は使えない。逆もまた然り。そこで最初のソラの質問に戻るが、闇の属性の者は光は使えない。光よりの火と風は使えな

いこともないが魔力にものを言わせることになる。ちなみに通常の４倍ぐらい魔力がいるな。」
「へ～。じゃあ私が水とか土を使おうと思ったら大変なんですね。」
「水の初級魔術はだいたい１００ぐらい魔力を消費するからな。ソラは４００ぐらいか。でも、技術があればかなり減らせる。」
「教えてください、シンヤさん。いや、師匠！！」
「久しく魔法は使ってないからな～。ストランバイアについたらヴァイスを呼んでみるか。」
「ヴァイスって光の神様じゃあ・・・・。」
「そうだけど？」
「ノワールさんと仲が悪いとかないんですか？ホラ、だって・・・光の神と闇の神だし・・・。」
「そんなことないよ。闇は悪いイメージを持たれがちだけど、決してそんなことはない。もうずっと昔のことだけど、『太極は両義を生じ、両義はやがて太極へと還る』という言葉があったんだ。この場合の太極は俺、両義は光と闇だね。光も闇も１つの存在から生まれた同じもので両方に差はない。光なくして闇はなく、闇なくして光はないから。だから二人は仲が良くても悪くなることはないよ。」
「そうですか・・・。良かった。」
「なんで？」
「私たちが会いにいったことで二人の仲が悪くなるなんて後味がわるいじゃあないいですか」
「後味が悪い、か。不思議な考えだな。」
「じゃあさっさとストランバイアに行きましょう。」
「そうだな。」

ソラ、魔法が使えるようになるのこと（後書き）

感想お願いします。また、私のキャラを出してほしいという方がいましたらご連絡ください。

設定：そのいち！

シンヤ
年齢：１００２０歳
種族：神
性別：男
魔力：∞
プロフィール：１６歳の誕生日にあらゆる世界を司る神（美少女）に神にされた。
能力：世界創造（世界を造れる、または造り変えれる）
世界管理（管理している世界のものにならばなんでもできる）

ソラ
年齢：１６歳
種族：人間（女）
魔力：シンヤの傍にいる限り永遠に増え続ける
プロフィール：目覚めたシンヤと最初にご対面。優しい。無邪気。シンヤ大好き。伯爵の娘
能力：チャーム（人と仲良くできる）
魔法無効化能力（今は制御できるようになった。魔力が消える）

エウレリア
年齢：１８歳
種族：人間（女）
魔力：３０００

プロフィール：腹黒。
能力：王族補正（魔力３倍）
　　カリスマ（指導力に補正）

ルドルフさん
年齢：４３歳
種族：人間（男
魔力：１０６２
プロフィール：ソラの父親。剣豪。伯爵。
能力：怪力（筋力に補正）
　　ソードマスター（剣の扱いがうまい）

拾いました。

突然ですが男の子を拾いました。あ、私はエクスカリバーです。ソラ様は知らないのですが、シンヤ様が私が意思を持つようにしてくれたのです。シンヤ様とソラ様は仲がよろしくてとてもうれしいです。でもシンヤ様がソラ様に甘くて、魔物とか一掃してしまうので私の出番がありません。私も武器として使ってほしいのに・・・あ、話がそれてしまいましたね。さて、何故男の子を拾ったのかというと、ソラ様達がストランバイアに向かう途中、魔物を倒していたら瀕死の男の子を見つけたのです。二人とも魔法は不慣れなので迂闊に『ヒール』は使えないということでシンヤ様が神のチカラを使って直したのですが、男の子は意識を取り戻しませんでした。そして今にいたります。あ、魔物が来ました。ソラ様が私の柄を握りました。ひさしぶりに使ってもらえる・・・！！

・・・・・誰に話しかけてんだ、こいつは。拾った男の子が目を覚まさないのでエクスカリバーの意識を読んでみた。エクスカリバー、・・・おもしろいぞ。あ、男の子が身じろぎした。目が覚めるかな？

「ん、ああ、ふにゅ～。」

強制的に起こしてみるか。そうだ、魔法を使ってみよう。『ウォーター・ボール』・・・あり？魔力、入れすぎたかな？ちょっとした小池程の大きさがある水の球体ができていた。・・・・・・・・・・・・・

・・・・このまま落とすか。

「オチロ」

ザッバーン！！！！と、男の子の顔面に落ちた。このままだと溺死するのですぐに水を消す。

「ふぇえええええ！！！な、何が！？」

男の子が起きた。いい関係はコミュニケーションからだ。さっそく話しかけてみる。
「よう。大丈夫か？」
「あ、あなたは誰ですか？」
「俺か？俺は通りすがりの旅人だ。なんか、道端でお前が倒れてたんで、助けたんだが・・・。」
「あ、ありがとうございます。私の村に魔物が出て、私が倒していたら群れに襲われちゃって・・・。そこから記憶がないです。」
「じゃあそこで意識を失ったんだな。ちなみに群れはまだいるぞ。連れが倒してるけれども。」
「え、そうなんですか！？私も手伝わないｔ「大丈夫だ。問題ない。」・・・え？」
「むしろ、手出ししないでくれるか？魔法の特訓中だから。」
「・・・わかりました。・・・あの？」
「私が住んでいる村によっていきませんか？お礼をしたいので・・・。」
「それは連れに聞いてからにするよ・・・て、ソラおかえり。『ファイアー・ボール』の威力調節できるようになったか？」
「はい！！だいたいコツはつかめました。ただ・・・一回魔力こめすぎてクレーターできちゃったんで直してもらえます？」
「わかった。後で行こう。ところで、拾った男の子目が覚めたぞ。」
「そうですか、よかったー。」
「あのー。私女の子なんですけど・・・？」
「「え？」」
「そこでそんな反応されてもこまるんですけど・・・。」

衝撃の事実！！男の子だと思っていたら女の子！？次話の続く！！

拾いました。（後書き）

この少女の名前を募集します。期限1週間です。

なかなかストランバイアにつかないな～

この男の子・・・もとい女の子の名前はユーリリア。１３歳。男の子だと思われたのは思春期の女子として傷ついたらしい。
「すまんな・・・。」
「もういいですから。よく言われますし。もうすぐ着きますよ」

ユーリリアの村は小さな村だった。村中の人が知り合いみたいな。村の入り口にはたくさんの村人がいた（といっても３０人くらい）。その中の４０ぐらいの男性が話しかけてきた。
「リア！！無事だったか！！心配したんだぞ！！」
「ごめんなさい！！お父さん、ヒック、ううぇーん、怖かったよ～！」
ユーリリアがいきなり号泣しだした。俺達の前では泣かなかったが父親の元に戻って緊張の紐が切れたというか、ようするに安心したのだろう
「あなたがたは・・・？」
母親らしき女性が話しかけてきた。
「この人達が助けてくれたんだよ！！」
「・・・そういうことです。ストランバイアへ向かっていたら偶然この子を見つけたもので。」
「ありがとうございます！！娘を助けてくださって。お礼と言ってはなんですがこの村に滞在していきませんか？」
「・・・じゃあ、御好意に甘えて。いいか？ソラ。」
「いいですよ。」
「そういえばこの村の名前は？」
「モマノルク村です。かつては鍛冶などで盛んだったのですが、鉱山を魔物が占領してしまって・・・。

噂では竜がすんでいるとか・・・。」
「そうですか・・・。」

この村に来てから3日目のこと。夜の晩餐でユーリリアの両親や村長と決して豪華とは言えないご飯を食べていた。これでも、この村ではかなり豪華な食事らしい。鉱山を魔物が占領してから鉱物を取りに行けなくなり、鍛冶を生業としていたこの村は大打撃を受けた。さらに魔物を討伐しようとした冒険者や若者が魔物にやられて死亡したり、魔物を倒そうという気概がない若者はストランバイアやカルサラに行ってしまったらしい。ギルドから依頼を受けて来た冒険者は皆、鉱山の中に入ってしばらくしたら青ざめた顔で戻ってきて皆口をそろえて「竜が出るなんて聞いてないぞ!!」といって帰っていってしまうらしい。・・・それにしても竜、か。会いに行ってみるか。
「村長。魔物を倒したら報酬とか出します?」
「はい。倒してくれるなら。」
「じゃあ明日行ってきます。」
「お気持ちは嬉しいのですが、村の娘を助けてくれた恩人にそんな危険なことをさせるわけには・・・」
村長がそういったところにソラがギルドカードを提示して、
「私たちこれでもSランクの冒険者ですよ?」
といった。当然のように皆驚く。
「本当に、倒してくれるのですか?」
「はい。というか竜に会いたいので。」
「ありがとうございます!!」

こうしてモマノルク鉱山に入ることになった。俺たちは、村長と大人の話（お金とか）をしてすぐに寝ることになった。

寝る前にソラに少し龍と竜について話をした。
「龍と竜ってどう違うんですか？」
「うーん。簡単にいえば、龍は魔獣で竜は精霊というか幻獣みたいなものかな？ていうか竜は俺が造った。で、竜は頭が良くて強くて人間に友好的。対する龍はそんなに頭が良くない。まあ人よりはいいけど。そして竜より強くない。俺≫≫越えられない壁≫≫≫≫神≫竜≫≫≫≫越えられない壁≫≫≫≫
龍ってとこかな。」
「ちなみに人は？」
「龍≫魔物≧人」
「人って弱。ていうかシンヤさん、神なのになんで神より強いんですか。」
「そもそも神を造った神だし。皆俺の一部みたいなものだからね。」
「ふーん・・・。でその神より“ちょっと”弱い竜を倒すんですか？」
「倒すかどうかは会ってから。龍だったら倒すけど竜なら説得する。」
「なんで龍なら倒すんですか？」
「龍は魔獣だから。魔物は倒さないといけない。魔物は世界のバグみたいなものだから。」
「バグ、ですか？」
「うん。この世界を造ってた時にいつのまにか現れてたんだ。」
「そういえば、説得するってできるんですか？」
「うん。人間は俺が生み出したのがどんどん増えてったから俺を知らないけど竜は俺が直接造ったから、俺の息子みたいなものだし。」
「へ～」
「明日朝早く出発するからもう寝るか。」
「はい。おやすみなさい。」

別に某ライトノベルをぱくってるわけじゃあありません

俺達は朝一で洞窟、もとい鉱山に向かった。案内役はユーリリアちゃんだ。最初は村長が行くと言っていたのだがどうしても付いて行くと言って言うことを聞かないので、連れていくことになったのだ。

「・・・そういえばノワールさんは？」

「ノワールは俺と合体したよ。」

「合体！？」

「ああ。もともと俺から生まれた存在だからな。ノワールが離れたいと言ったら離れるけど。」

「へー。あ、魔物。（ザシュッ！！）」

ソラがどんどん魔物を駆逐していく。さすがルドルフさんの娘。ユーリリアちゃんは少し怯えている。

魔物が怖いのだろう。

「大丈夫だからね、俺達がついてる。」

「ありがとうございます。」

（ロリコンは犯罪ですよ？）

ノワールが囁く。そしてソラの目がこう言っている。

『後でお・は・な・し・しましょうか？』

やばい。殺される。

「どうしたんですか？」

突然脅え出した俺を心配してユーリリアちゃんが問いかけてくる。

「大丈夫だ。問題ない。」↑死亡フラグ

鉱山の奥の方に来るといきなり開けた場所に出た。ワイバーン（５ｍぐらい）なら自由に飛びまわれるぐらいの大きさだ。そしてその真ん中には・・・・・・竜がいた。全長２０ｍぐらいの紅蓮の竜だ。そして俺は竜に近づき話しかける。

「ひさしぶりだな、イノケンティウス。」
「おひさしぶりです。我が主。」
「どうしてこんなところにいるんだ？人間達が困っているぞ？」
「人間なんぞに肩入れするのですか？見たところお連れの方も人間のようですが。でも我が主が出ていけというのなら出ていきますと言いたいところですが・・・・・・出れなくなりました。」
「は？」
「実はですね・・・・・・ここに瘴気がたまってるんです。それも我では浄化しきれないほどの。それで魔物がどんどん出てくるんです。我が主が眠っていたのでまた封印したのですが、人間が封印を解いてしまったのでまた封印してるのですが、今度はもっと強力な奴にしてたら魔力がほぼなくなってしまって。
だから身体を小さくできるぐらい魔力がたまるまで、封印が解けないようにここで番をしてるんです。」
「・・・。・・・わかった。今回だけ特別だ。フエロ」
イノケンティウスの魔力が本来の量にもどる。
「ありがとうございます、我が主。」
「今回だけだからな。人間の方には説明しとくから。」
「はい。じゃあ『メタモルフォーゼ』」
イノケンティウスの身体が光り出しだんだん小さくなってソラと同じくらいの少女になった。炎髪灼眼の美少女だ。
「ついでだけどソラにテストしてやってくれないか？」
「何故です？なぜ我が人間と契約などしなければならないのですか？」
「人間は悪い奴ばっかじゃあないぞ？それにテストで確かめてみればいいじゃあないか。」
「・・・・・・はい。」
「よし、決まり。・・・・・・ソラ！！なにやってんだ？早く来い！！」
・・・叫びながら振り返るとソラとユーリリアが固まっていた。

「・・・大丈夫なんですか？」
「・・・俺も不安になってきた。」

５万ＰＶ突破記念

祖父の一周忌の法事から帰ってきたら、５万ＰＶ超えてた作者のたまごです。よろしく！！同じシリーズの、
俺の世界：さらに一万年後に出てくる神谷伊予ちゃんも出てきます。
今回は作者の書き忘れたけどまあいっか～みたいな設定を暴露しまくります！！

そのいち！

たぶん物語で一番重要（？）な容姿。これをまったく書いてないね！！何やってんだろう、俺！！

じゃあまずはシンヤから！
鉄神矢・・・黒髪黒眼。ポニーテール。腰まで髪が。身長：１７０センチ。本編では一度もなかったが時折女性と間違われる。女物の服を着ればそこらの女よりかわいい。男に迫られたりすることも。

「ちょっとまてやコラ」

シンヤさんが入室しました。

どうしたシンヤ。不満か？

「当たり前だ。なんだよかわいいて。俺男なんだからかっこいいとかにしろよ。」

これでどうだ！！
鉄神矢・・・黒髪黒眼。ポニーテール。腰まで髪が。身長：１７

０センチ。本編では一度もなかったが時折女性と間違われる。女物の服を着ればそこらの女よりきれい。男に迫られたりすることも。大抵の女の子にかっこいいと言われる（男としてはみられていない）

「・・・おいこら」

次、真・神モードシンヤ・・・金髪銀眼。無表情。発動条件：本編でいつか紹介。

「この厨二病作者がああああぁぁぁぁぁ！！！」

うおうっ！！真〈以下略〉になった！！ていうか消されそう！？こうなったら！！

「キエ」

シンヤさんは管理人によって強制退室になりました。

助かった～。もうすこしで消えるかと思った。じゃあシンヤは終わったからお次は・・・ソラです！！

ソラ・・・クリーム色の髪と眼。ロング。身長：１５５センチ。本編では言ってなかったが、最初に会ったときはシンヤを女だと思い、同性愛に目覚めそうになったとか。

「そうなんですよ～。シンヤさんが男って知ったときはびっくりでした。」

ソラさんが入室しました。

「作者さん、もっとシンヤさんといちゃいちゃさせてください。」

本編では無邪気でおしとやかな（？）ソラさんがまさかの発言！！

「実は私は策略家です。」

・・・ええええええっっ！！？？まさかの問題発言！？

「ＭでもＳでも、どちらもいけます。」

ソラがキャラ崩壊を起こしてるぜ！！・・・ほっといて次いこう。

ルドルフ・・・やせマッチョ。金髪碧眼。身長：１８０センチ。

色白。かっこいい。だんでぃー。親ばか

常識家（？）。

「本編では言わなかったが、あえて言おう。娘は嫁にはやらん！！」

がんばれ、ソラ。

5万PV突破記念（後書き）

ほかのキャラの補足はやる気が出たらがんばります。

試練（前書き）

更新遅れました。すみません。

試練

ソラが受けることとなった試練（本人事後承諾）の内容は精神的なものだ。その試練はとても簡単。
イノケンティウスの精神空間に入ることだ。そもそも契約とは相手の存在をすべて受け止めるものだ。竜は様々な事をその人生（？）で経験している。普通の人には到底耐えられるようなものじゃない。それでも受け止めれるものだけが竜と契約できる。・・・・・・ちなみに今まで成功したものはいない。大抵、廃人となる（自分の精神空間に閉じこもる）。一部は逃げ帰る。ソラは耐えれるだろう。存在を解析してみたとき（魔法無効化能力をおさめたとき）、何かわからない特別な力、それも大きな力を感じた。だから、たぶん大丈夫。

「そろそろ始めるぞソラとやら。合図をしたら我の胸に飛び込んでこい。」
いよいよ試練が始まる・・・
「3・・・2・・1・今っ！！」
ソラの精神体が身体を抜け出してイノケンティウスの胸に飛び込んで行くのが見える。・・・ユーリリアには見えないだろうが。神様の特権だ。

ｓｉｄｅソラ

イノケンティウスさんの胸に飛び込むと一瞬白い光に包まれ・・・眼をあけると火山のようなところにいました。そこには黒く腰まである髪に、同じく黒い瞳を持つきれいな女性がいました。向かいには子犬程の紅い竜（竜と龍の見分け方もシンヤさんに教えてもらっ

た）がいます。そして、話しかけています。
「・・・？」
「言葉はわかるな？俺は鉄神矢だ。お前を造った者だ・・・簡単にいえば主だな。そういえばお前に名前をつけてやらんとなあ。・・・よし、決めた。お前の名前はイノケンティウスだ。」
「イノ、ケンティ、ウス？」
「そうだ、イノケンティウスだ。」
「あり、がとう。」
「どういたしまして」

『まさか精神の一番奥まで行かれるとはな。』
いきなり頭の中に声が響いてきました。
『あなたは・・・？』
『イノケンティウスだ。・・・しかし、お前はいったい何者だ？我が主が見込んだとはいえ普通の人間が我のもっとも深いところに入れるわけがない。』
『あれ、は？』
『我が生まれたときだ。・・・ここまで入れる素質を持つ者なら我と契約できるな。』
『素質？』
『素質がないものはもっと浅いところまでしか入れんよ。そして精神防壁に触れて廃人になる。見事奥まで入ってきたお前は素質が十分あるということだ。』
『私ってすごいんですか？』
『ああ。・・・話はこれくらいでおいといて契約の説明をするぞ。我と契約すると魔力が増える。というか我と合体するのじゃ。』
『合体？それってシンヤさんとノワールさんみたいなものですか？』
『ちと違うな。ノワールは我が主からできた存在だから、我が主と合体するのは元に戻るのといっしょじゃ。我とお前の場合は文字通り合体。』

『おお〜〜』
『わかってもらえたところで契約するかの
汝は
我と
契約することを
望むかえ？』
『はい。』
『では杯の中身を飲み干せ』

その言葉を聞くと視界が暗転、現実世界に戻りました。気のせいでしょうか、時間が止まっているような気がします。目の前にイノケンティウスさんの姿はなく、代わりに大きな杯があります。杯とはこれのことでしょうか。中に紅い液体が入っています。それを私は一気に飲み干します。一口入るごとに身体が熱くなります。そして、いろいろなイノケンティウスさんの記憶や思いが流れ込んできます。

・・・全部飲み干すと時間が動きだしました。もう、精神的にくたくたです。

山賊狩りをしようか

イノケンティウスと契約し、精神的疲労で倒れかけたソラを支える。まあ、人の身で契約できたこと自体が奇跡なのだ。この程度で済むとは。想像以上の素質があるかも知れない。・・・イノケンティウスがソラの身体から出てきた。

「我が主の言うとおりですね。試すまでもなかった。」

「だろ？じゃあ無事に契約できたところで村に帰るか。」

「そうですね。」

ソラを背中に背負う。・・・あれ？ユーリリアちゃんは？

「きゃーーー！！」

「うるせぇ！！おとなしくしろ！！」

あれは山賊だろうか。ユーリリアちゃんが抱えられて連れて行かれる。

「えーい！！」

「ぐぎゅっ！！」

あ、一人が股間を抑えて倒れた。あーでもやっぱりたくさんの相手はきついのか・・・。そろそろ助けにいくか。

「我が主。あの山賊共をついていけば、アジトに行けるのではないでしょうか。」

「で、お宝ゲット&山賊をギルドに引き渡してお金に変換と。」

「はい。お金持ちですよ、フフフフフフフフフ」

「ハハハハハハハ。まあ俺は造れるけどな。」

「そうでしたねフフフフフフフフフフフフ」

「でも、山賊狩りもいいかもなハハハハハハハハハハハハハハハハ」

ユーリリアちゃんを運んでいる山賊共について行くと（ユーリリアちゃんは気絶してます。）さっきいたところとは違う広い場所に出た。神様能力で姿を消しているのでばれません。ユーリリアちゃんは・・

・・・・あ、違う部屋に連れてかれてる。部屋の中には・・・４人の女の人がいた。着ている服はボロボロだ。皆虚ろな表情をしている。その眼から光は見えない。

『山賊達の慰み物にでもなったのでしょうか』

『そうだろうな。助けてやろうか』

部屋に入って行こうとしたその時、後ろの方で爆発が起きた。

「な、なんだ！？」

「敵襲だ！敵襲！！」

そして・・・見たことある顔が現れた。

再会（前書き）

すみません。遅れました。

再会

現れた知ってる顔は・・・
「誰っだっけ？」
「「「「ちょっ！！」」」」
学園のＳクラスメンバーだった。

「とりあえず狩りは中断して、話してみるか。アツマレ」
山賊が目の前に引き寄せられる。出るわ出るわ。蟻みたいだ。その中の２人が剣で斬りかかってくる。
俺は避けずに身体で受ける。すると剣が折れた。山賊の顔が驚愕に染まる。
「ダマレ。シバラレテロ」
文句を言っていた山賊の口が閉まる。そして何処からともなく現れた縄に縛られる。
「これで落ち着いて話ができるな。」
「ん、あ、ああ。」

「元気だったかカイト」
「ああ。おまえがいなくなるときにソラちゃんを連れてくから、悲しかったんだぞ？」

山賊を連れてカイト達と村へいったん帰ってきた。カイト達の話によると学園内の学生用のギルドができたので、Ｓクラスメンバーで暇だから受けてみるかという話になり、ここまで来たらしい。
「そういえばなんでおまえらここにいるんだ？てか、ソラちゃんな

んで寝てんの？」
「何故ここにいるか？それは偶然。ソラが何故寝ているのか？それは竜と契約したから。」
「は？龍と契約？魔物なんかと契約したの？」
「龍じゃない。竜だ。強さが段違いだからな。強さ的には俺≫≫越えられない壁≫≫≫≫神≫竜≫≫≫≫越えられない壁≫≫≫≫龍≫魔物≧人ってとこだ。」
「ふうん」
カイト達は明日帰るらしい。まあ、山賊を捕まえたんだから当然といえば当然だが。
「そうだ。姫さんにいっといて。『追ってきたらこの世界を造りなおすよ？』って」
「は、は、は。怖い冗談だなあ。（ダラダラ）」
「安心して。冗談じゃあないから。」
「・・・・・・。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4044o/

俺の世界

2011年1月22日02時10分発行